

# 日本人学生と留学生による 英語ベースのグループワークにおける 日本語へのコードスイッチングの機能

田崎 敦子

## 1. はじめに

近年、日本の大学では、国際的な場で活躍できる日本人学生の養成や、より多くの留学生の受入れを目的として、英語を共通言語として教育を行うプログラムが増えている。こうしたプログラムでは、日本語能力が要求されないため、留学生の占める割合が高い。日本人学生と、多様な言語、文化背景の留学生が、非英語圏である日本で、英語を共通言語とした場合、その言語使用状況は複雑である。

まず、日本で学ぶ留学生の大半は非英語圏出身であるため、日本人学生同様、ほとんどの留学生にとって英語は母語ではない。よって、日本人学生と留学生は、お互いの外国語能力を補いながらコミュニケーションを達成しなければならない。また、大学の外では、日本文化を背景にした日本語のコミュニケーションが行われているため、来日後、大半の留学生は、日常生活のために日本語学習を始めており、少なくとも初級レベルの日本語は、英語に加えてもうひとつの共通言語となり得る。

このような言語環境の中で、日本人学生と留学生はどのように英語と日本語を使い分けているのだろうか。また、それはコミュニケーションにどのような効果をもたらすのであろうか。本研究では、二言語使用の効果が明らかにするために、大学院の研究活動で頻繁に行われるグループワークのコミュニケーションに焦点を当て、そこで使われる日本語へのコードスイッチング（以下、CS）が、グループワークの遂行にどのように貢献するかを分析する。

## 2. CSの定義

本稿では、Cook (2002) に従い、CSを話し手と聞き手の双方がその二言語を理解している場合に起こる言語交替とする。よって、日本語母語話者（以

下、NS）、または、中、上級レベルの日本語学習者（以下、NNS）が、ベースとなる英語から初級レベルの NNS に理解できない日本語表現に切り替えた場合は CS とせず、初級レベルの NNS を含めたグループの参加者全員が理解可能な日本語への切り替えのみを対象とする。

なお、ここでは、CSが含まれた発話が前後の文脈に即しており、かつ、その発話に対し、参加者から同意表現や笑いなどの反応があり、全員が話題に参加していることを確認できた場面を「全員が理解した」と見なす。

## 3. 分析対象と分析方法

分析対象とするグループワークは、英語で専門教育を行っている大学院のコースで、2002年10月から2003年3月に開講された「異文化間コミュニケーション学」（共通言語：英語）の講義で行われたものである。この講義の目的は、NSとNNSの相互理解を深め、両者のコミュニケーションを促進することにある。講義全体の構成は、前半が異文化間コミュニケーションの基礎知識に関する教師中心の講義、後半がNSとNNSの混合グループで、「来日したばかりのNNSが日本で生活する際に必要な情報を英語で作る」という課題を達成するグループワークとなっている。

グループワークは4コマ（1コマ90分）の講義で行われた。講義では、4つのグループが作られたが、参加者の変動などの理由から、今回はグループI（以下、GI）と、グループII（以下、GII）の3回分（計約4時間）のグループワークのコミュニケーションを対象とした。（4回目の講義は、発表資料作成のためのコンピュータ操作が中心で、コミュニケーションが活発に行われなかった。）

GI は「大学の施設の使用方法」、GII は「医療関係の手続き」に関する情報作りを課題として選んだ。グループの構成は、GI: 日本人 2 名、中国人 3 名、ラオス人 1 名/GII: 日本人 2 名、ベトナム人 3 名、ミャンマー人 1 名となっている。参加者の出身国に偏りがあるのは、学生の課題に対する興味を優先してグループ分けを行ったためである。

参加者の英語能力は、正確に測定されていないが、この大学院の入学条件として「研究活動を行う英語能力」が要求されており、入学試験には英語の筆記試験がある。しかし、コミュニケーションの経験は少なく、今回対象にしたグループの参加者に関しては、フィリピンに 2 年間滞在経験のある NS 1 名、オーストラリアに 4 年間滞在した NNS 1 名（ラオス人）を除いて、英語でグループワークを行ったことはほとんどなかった。

NNS の日本語学習暦は、中国人 3 名のうち 1 名が 1 年、ベトナム人 3 名のうち 1 名が 10 年で、その他は全員大学院入学後日本語学習（週 3 コマ）を始め、グループワークが行われた時点の学習暦は 3 ヶ月であった。

グループワークは録音・録画され、そのデータはすべて文字化された。これらの資料から、2 つのグループで観察された CS をすべて抽出した。また、各自のコミュニケーション活動をより詳細に分析するために、グループワーク終了後、参加者全員に対してフォローアップインタビューを行った。

上記の資料をもとに、抽出された CS の中から、グループワークの目的である課題達成、そのために必要な協力体制を支える人間関係の構築 (Clark&Slaine, 2003) に寄与する CS に焦点を当て、その機能を分析する。

## 4. 結果と考察

### 4.1 課題達成を助ける CS

課題達成のために必要なコミュニケーションを促進する CS の機能は、以下のように分類された。

#### 4.1.1 情報の共有化

日常生活に関連した「銀行」、「研究室」、「実験」、「携帯」などの語彙は、日本語に切り替えられて使われていた。フォローアップインタビューで、日本語初級レベルの NNS から、こうした日本語の語彙は、日頃から NNS 間でも使用されており、むしろ日本語の方がわかりやすいという報告があった。

例 1 は、NNS が、来日時、大学の施設の使用方法に関してどのように情報を得たかということをお話している場面である。918:C2 は、助けてくれた人について英語で説明しているが、他の参加者が理解していない様子であったため、NNS 間でも頻繁に使われる「先輩」という日本語を使ったところ、J2 も C1 もはっきりと理解できたことが 921:J2 と 922:C1 の反復表現からわかる。J2、C1 の理解を受け、923:C2 は、さらに、先輩が大学の施設についていろいろ教えてくれたことを述べ、情報収集に関する話が発展した。

(例 1)

918:C2 Maybe some members in your laboratory graduated from this university. Undergraduate from this university. ...

919:J2 Um...

920:C2 For example, in our--in my laboratory there is a ...先輩。

921:J2 ああ、先輩。〈全員の笑い〉

922:C1 先輩。〈笑い〉

923:C2 So he know everything about university, and he explain in Chinese. Easy.

(例で使用される記号は、J:日本人、C:中国人、L:ラオス人、V:ベトナム人、M:ミャンマー人を示す。)

#### 4.1.2 意見の統一化

英語をベースとしたコミュニケーションの中で、日本語を使用すると、その表現が際立ち、強調される効果があるため、CS が含まれた発話は全員の注目を集める。その結果、英語のみのコミュニケーションに比べ、参加者の理解が得やすく、グループ内の意見の統一が容易になることがわかった。

例 2 は、体育館の使用方法について話している場面である。(433:C2 の前に、C2 が「体育館」の日本語表現を NS に質問したので、全員が「体育館」の意味を理解している。) 433:C2 が体育館に入る際にはカードが必要であることを述べると、435:L1 がそれを施設の情報に入れるべきだと提案する。436:C1 が、日本語で同意し、参加者の注目を集めたことで、437:J1、438:C1 の同意表現もすぐに引き出されたのであろう。その結果、体育館についての意見が統一され、439:L1 が、体育館ではどのようなスポーツができるのかという新たな質問をした。そして、体育館についての話題はさらに広がり、施設の使用方法に関する情報を増やすことができた。

(例 2)

- 433: C2 I need my card entering 体育館。  
434: C1 Oh, yeah.  
435: L1 You see, that's very important that it should be incorporated in that point.  
436: C1 ああ、そうですねえ。〈全員の笑い〉  
437: J1 Yeah, we need it.  
438: C1 That's good.  
439: L1 What kind of sports we can do?

#### 4.1.3 話題への関与の強化

NNS が、自分自身や他の参加者が使った英語表現に対する日本語訳を知っている場合、その英語を日本語で言い換える場面があった。こうした NNS の日本語使用に対し、NS は笑いながら NNS の日本語を繰り返すということが多かった。

例 3 は、施設の使用方法について、担当者に聞きに行く計画を立てている場面のやりとりである。

(例 3)

- 745:L1 But are we going together?  
746:J1 Together?  
747:L1 Yeah, together, いっしょに?  
748:J1 Yeah, いっしょに。〈笑い〉It's okay. When? When can you go together?  
749:C1 Next Tuesday, 火曜日?  
750:L1 火曜日。  
751:J1 Yeah, 火曜日。〈全員の笑い〉

J1 が、748:J1、751:J1 で、747:L1、750:L1 の日本語を繰り返していることに注目したい。反復には、話題への関与を強化し、談話の発展を促す効果がある(Tannen, 1989)。本稿で対象にしているような英語のコミュニケーションに慣れていない者同士の話し合いでは、英語がうまく聞き取れず、話し合いについていくことが困難な者が多く、英語ではこのような反復はほとんど起こらなかった。しかし、CS により反復が起きたことを見ると、CS には話題への関与を強める効果があると言えるであろう。

#### 4.2 人間関係構築を助ける機能

良好な人間関係を築き、協力体制を強化するためには、リラックスした雰囲気作りや、レポートの形成などが求められる。以下に、こうした人間関係構築に貢献する CS の機能を示す。

##### 4.2.1 笑いによるレポートの生起

佐々木 (1994) は、小グループの座談において、冗談、あるいは話者がまじめに言ったことが、他者

におかしい気持ちを起こし、その反応として笑いがあった場合、それはレポートの表示であると述べている。

今回観察された CS の後には、必ずグループ全体に笑いが起きている (例 1~5 参照)。この笑いについて、NNS は、自分たちの日本語の発音や表現が正確でなかったことが原因だろうとフォローアップインタビューで述べているが、否定的には捉えていない。一方、NS は、NNS が英語の中に突然日本語を入れたことが単におかしかったと答えている。しかし、NS も NNS も、この笑いによってグループ全体がリラックスできてよかったと感じている。これらの結果は、CS にレポート形成を助ける働きがあることを示している。

##### 4.2.2 冗談の強調

グループのコミュニケーションでは、参加者が緊張を感じやすく、それがコミュニケーションを阻害することがあるという (Bormann, 1996)。その中で、参加者がリラックスしていることを示す指標のひとつとして、冗談が交わされ、笑いが起きていることがあげられる。今回のグループワークでは、冗談の中に CS が使われると、冗談そのものの持つおかしさに、CS 使用の意外性が加わり、おかしさが倍増されるという場面が観察された。

例 4 では、V3 (女性) がクラス外で連絡を取るために、リーダーである J3 (男性) の携帯電話の番号を知りたいと言った後のやりとりである。1239:V2 が V3 は個人的に J3 の番号を知りたいのだからかかと、1240:V3 が反論する。この反論が、突然日本語でなされたことで、参加者はより面白さを感じた。

また、初級レベルの学習者にもわかる CS が含まれた冗談は、参加者の注意を引くだけでなく、全員が理解できるという特長もある。例 4 でも、全員が笑いを共有したことで、緊張を緩和する効果がさらに高まったと言える。

(例 4)

- 1239:V2 She wants your 携帯 number. 〈笑い〉  
1240:V3 いいえ、いいえ、いいえ。  
〈全員の笑い〉グループのために…  
1241:V1 ああ、そうですかあ。〈全員の笑い〉

##### 4.2.2 依頼の円滑化

例 5 のように、NNS が NS に依頼をする際に、

日本語を使用したことで笑いが起き、その依頼が円滑に行われた場面が見られた。

(例 5)

- 1059:J3 Who is doing presentation?  
1060:V3 Please do it.  
1061:M1 お願いしまーす。〈全員の笑い〉  
1062:J3 えー。  
1063:V1 大丈夫、大丈夫。〈全員の笑い〉  
1064:J3 Okay, I will do it.  
1065:M1 がんばって。

フォローアップインタビューで、NS は、NNS が突然日本語を使ったこと、そして、それが場面に合っており、そのままコミュニケーションが継続されたことがおかしかったと述べている。NNS も、学習した日本語でコミュニケーションできたことが楽しかったという。NS、NNS が共に参加したこの笑いによってリラックスした雰囲気生まれ、NS は依頼を受けやすくなったのではないかと考えられる。

#### 4.2.4 交話の促進

グループで効率的に仕事を達成するために必要な人間関係は、仕事以外のことを話題とする「スモートーク」、つまり交話を通して構築されるという (Reich&Wood, 2003)。今回のグループワークでは、CS が交話の促進を助ける働きをしていた。4.2.2 の「冗談の強調」も、その例である。その他、NNS が日本語表現について NS に質問する際に使われた CS にも交話促進機能が見られた。このグループワークの目的は、日本語を学ぶことではなく、日本語を使用する必要はないが、NNS は、一旦英語で表現したことを、日本語ではどのように言うのか NS に質問することがある。日本語を学んでいる NNS は、NS の話を熱心に聞く。一方、英語のコミュニケーションに苦労していた NS も「教える」という立場で話しやすくなり、両者のコミュニケーションが促進されるという効果が見られた。

#### 5. まとめと今後の課題

今回対象にしたグループワークでは、英語が共通言語として設定されていた。しかし、その中で、

NNS に理解可能な日本語への CS が、グループワークのコミュニケーションを促進させることがわかった。このような CS の効果には、このグループワークにおける日本語の役割が大きく影響していると思われる。英語能力に差がある参加者間では、初級レベルの日本語が全員確実に理解できる共通言語として有効に働いた。また、NS の母語である日本語を使用することで、NS と NNS 間の心理的距離が縮まったこと、さらに、学習者同士である NNS 間の連帯感を強めたことも、CS がコミュニケーションに効果的に働いた要因ではないだろうか。

本研究で得られた結果は、たとえ英語を共通言語としていても、日本の大学では、日本語学習が有効であることを示唆している。今後、CS の発生率や各機能の出現頻度を調べる量的な分析を行い、CS の機能の細分化、一般化を進め、その成果をこうしたプログラムの日本語教育の開発に反映させたいと考えている。

#### 参考文献

- 佐々木倫子(1994)「会話スタイルとラポーター-日米若い女性の座談例から-」、『国立国語研究所報告 107 研究報告集』15、252-286。  
Bormann, Ernest G. (1996) *Small group communication: theory & practice*, third edition, Edina :Burgess Publishing.  
Clark, Carolyn & Sline, Richard (2003) *Teaming with emotion: The impact of emotionality on word-team collaboration*, In R. Hirokawa, R. Cathcart, Samovar, and L. Henman (Eds.) *Small group communication—theory and practice—*. Los Angeles, CA: Roxbury Publishing Company, 158-168.  
Cook, Vivian (2002) *Second language learning and language teaching*. London: Arnold.  
Reich, M. Nina & Wood T. Jilia (2003) Sex, gender, and communication in small group, In R. Hirokawa, R. Cathcart, L. Samovar, and L. Henman (Eds.) *Small group communication —theory and practice—*. Los Angeles, CA: Roxbury Publishing Company, .218-229.  
Tannen, Deborah (1989) *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*, Cambridge: Cambridge University Press..

たさき あつこ／東京農工大学留学生センター  
tasaki@cc.tuat.ac.jp